



武藤 英二

高島屋  
社外監査役



私は35年に及んだ日本銀行での勤務を通じ、長崎、下関、名古屋、大阪と、4回の支店勤務を経験しました。いずれも良き思い出ですが、中でも長崎、下関は格別です。1972年から2年余りを過ごした長崎は、東京近郊で生まれ育った私にとって、初めて生家を離れて暮らす場所となりました。1993年から2年近く支店長を務めた下関では、地元経済界の方々と実に密にお付き合いいただきました。そういう「原体験」に加え、長崎と下関に共通点が多いのも、思い出深さを増幅させています。

長崎が九州の西端ならば下関は本州の西端。共に山が海に切り込んで天然の良港を生み、水産と造船が主力産業に育ちました。明治維新の原動力となった若者たちの遊学先も長崎と下関。狭隘な地形の制約もあって、人口が1970年代で頭打ちとなったのも軌を一にしています。

もちろん、違いもあります。下関には県庁はなく、町の規模では長崎に及びません。また長崎は、鎖国時の出島交易に加え、明治以降は上海航路の基地となったため異国情緒に溢れています。下関にも、朝鮮半島への起点だった名残はありますが、長崎のようなロマンには欠けます。そうした差はあ

れ、長崎での居住経験からか下関滞在中には既視感めいた思いに襲われたものでした。

写真は二葉とも、いろいろな行事に駆り出された下関時代のものです。上は数多くの依頼を受けた乾杯挨拶、下は「しものせき海峡まつり」の源平船合戦に参加し、熊谷直実に扮したときの1シーンです。

長崎も下関も、人口減への対処や新たな産業の育成など、難しい課題に直面しています。共に日本の地方が抱える課題を先取りしてきたフロントランナーともいえます。もう一つの共通点である「進取の気性」で力強くフロンティアを切り拓いてほしい——ファンの一員として長崎&下関には、そう願ってやみません。

西端の二つの港町



ある懇親会での乾杯挨拶

長崎&下関



熊谷直実に扮して源平船合戦に参加